旧渋沢家住宅の変遷 1

深川の渋沢家住宅

旧渋沢家住宅は、明治から昭和にかけて渋沢栄一とその家族が暮らした住宅です。明治9年（1876）4月、栄一は深川福住町（現・永代2-37）に土地と家作を購入し、同年8月に転居しました。同10年（1877）10月、栄一は住宅の改修を行い、その設計施工を清水組二代目の清水喜助に依頼しました。喜助は既存の建物とは別に木造2階建の建物である「表座敷」を新築し、同11年（1878）11月に落成しました。

栄一が深川にはじめて建てた「表座敷」は、良材や銘木が随所に用いられており、天井には桐や神代杉の一枚板が使われています。また、釘などの金物を使わずに木を組み合わせる伝統的工法によって仕上げられています。一方、階段は親柱と手摺子には黒柿、笠木には紅紫檀、段板には欅の銘木が用いられ、洋風の意匠でつくられています。このように「表座敷」には和風と洋風の意匠が混在しており、伝統的木構造の技術と洋風の要素との融合が建物の特徴となっています。

明治21年（1888）12月6日、栄一は日本橋区兜町（現・中央区日本橋兜町）に転居し、深川福住町の住宅は、長男篤二と孫の敬三の住まいとなりました。その後、明治24～33年（1891～1900）頃には増改築が行われ、「表座敷」の東に隣接して2階建の離れが建てられました。

「表座敷」階段（清水建設株式会社所蔵）

「表座敷」2階 客間
天井は、神代杉の一枚板で、畳の縁にあわせて配置している
（清水建設株式会社所蔵）

深川から三田へ

当時の深川は、水害にたびたび見舞われたことなどから、渋沢家では深川からの住居移転を考え始めました。そして、明治38年（1905）、芝区三田綱町（現・港区三田2）の敷地を購入し、同41年（1908）、深川福住町から建物を移築しました。移築に際しては大規模な増改築が行われたようですが、「表座敷」はほぼ形を変えずに残されました。

明治以降、住宅建築においては洋風化から和洋折衷の建築様式が大きな流れとなりました。三田綱町の住宅も昭和4～5年（1929～30）にかけて、敬三によって大改造が行われました。「表座敷」を除き、和館の大半は解体され、客間・書斎・食堂などを備えた洋館が増築されました。